

宗教思想とその社会的役割

松本 周

筆者の現在に至るまでの研究は、キリスト教神学の中の組織神学、特にキリスト教社会倫理分野に属している。この分野に関心を抱くようになったきっかけは、ほかならぬ聖学院大学との出会いであった。欧米文化学科第一期生として入学した私はこの大学で、キリスト教会が社会・文化を形成してきた歴史について、特にプロテスタントイズムと近代世界との特別な関係について学び、またそれ故にプロテスタント・キリスト教が現代文化・社会に固有の責任を担っていることを知らされた。これらの経験が研究の方向を決定づけた。加えて、自らの信仰の源流である、日本キリスト教史への学問的関心が与えられたのも聖学院大学での出来事だった。

その後、東京神学大学・同大学院ではラインホルド・ニーバーの著作に親しみ、修士論文で彼の歴史観について扱った。さらに聖学院大学大学院博士後期課程で研究を継続するにあたり、二つの方向を考えた。一つはニーバー研究の継続であり、もう一つは日本キリスト教史研究であった。結論的には両テーマが交叉する、大木英夫神学を研究主題とし、『日本の神学』の構築——大木英夫神学基礎構造の研究」と題する博士論文へまとめた。

同論文では思想研究と社会史的理解双方の視点を保持し、研究対象への接近と分析を試みた。一方では対象の内在的思惟に密着し思想構造の解明を志向したが、それを社会と切断された観念的産物とはみなさず、他方で研究対象のおかれた時代社会史的動向を把握し、それらの相互関係下において思想の形成発展を理解した。またそれにより思想の有する社会倫理的意義と有効性を分析した。さらに大木の思想の特色として、1945年8月15日が日本社会の大転換として捉えられ、社会思想の骨格を形づくっている点を明らかにした。そこで日本国憲法に含蓄されている理念的諸項目と大木の拠って立つプロテスタント思想との関係について扱った。なお、この観点から、大木は永

井隆に注目した。

論文での関心を継続しつつ、キリスト者の被爆思想とその社会的役割の問題について主題的に扱うことを、筆者の当面の研究テーマとして考えている。長崎での被爆者、永井隆はその出来事について「第二次大戦終戦のための犠牲」と述べた。この犠牲なしには、日本国憲法とそれにより保障された戦後日本は存在し得なかった。永井は原爆により妻と多くの知友を喪った。にもかかわらず、自身にとっての否定的事実を、神的摂理によって導かれた、戦後日本への犠牲と捉えることにより意義づけた。したがって戦後日本に生を享けた者は、その「生」があつた「犠牲」と結びついてはいるが故に、生における倫理と社会的責任を問いかけてられている存在なのである。

こうしてキリスト教精神に裏打ちされた被爆思想は、社会的責任性についての新たな視野を開くものとなった。しかしまた近年、高橋哲哉が永井を批判し、国家が国民に強制する犠牲の論理を、国民の側から補完する言説であると述べている。

このように評価が分かれる永井思想をいかに捉えるかが課題である。そして他の被爆キリスト者たちの言説をもふまえつつ、その今日的意義についても考究したい。最近では米国大統領が「核兵器を使用した唯一の核保有国として核廃絶に向けて行動する道義的責任」について述べた。この世界動向を促進する社会的役割とその動力をも先述の思想は有していると考えるからである。聖学院大学へ奉職させていただいた者として、キリスト教思想とその社会的役割を探求するとの研究課題をもって歩み始めたい。

(まつもと・しゅう 聖学院大学総合研究所助教)